

福井県における大正新教育運動に関する研究

増田 翼・松川 恵子

(2012年1月31日受理)

はじめに

明治末期から昭和初期にかけての日本では、〈大正新教育運動〉あるいは〈大正自由教育運動〉と称される教育改革運動が展開された。その運動内部で掲げられた新教育思想の意義や本質、あるいは運動そのものの史的展開は多種多様であるが、全国各地で起こったこの運動の大まかな共通点を見出すことは可能である。すなわちそれは、画一的、注入主義的な教授一辺倒の「ヘルバルト主義的教育（旧教育）」¹⁾から、教育上の自由への要求を原動力とし、個性や自発性を有する子どもの学習に目を向けようとする〈新教育〉への転換、という共通点を有しているといえるであろう。

今回取り上げる福井県においても、この点については同様である。そもそも一般的に、福井県における大正新教育運動というと、勝山市出身の木下竹次（1872-1946）から新教育の〈いろは〉を教わった三好得恵（1880-1959）が、1920（大正9）年、三国尋常高等小学校——現在の三国南小学校（以下、三国小と表記）——校長として赴任し「自発輔導主義」を提唱、日本全国から参観者を集めた実践が有名である。また、その三好とともに「自発輔導主義」を推進した広瀬均（1889-1972）が、1922（大正11）年、福井県師範学校附属小学校（以下、福井師附小と表記）へ転任し「ドルトン・プラン」の実施を試みたことも忘れてはならない。実際、1924（大正13）年のヘレン・パークースト（Helen Parkhurst: 1887-1973）来日の際には、福井師附小（4月15日）、三国小（4月16日）などを見学している。

このような福井県大正新教育運動史を明らかに

してきた文献としては、小原國芳編『日本新教育百年史』や『福井県教育百年史』、あるいは森透の「福井県における大正自由教育の研究」などが挙げられるほか、特に三国小を中核テーマとする研究に、秋田慶行『三好得恵と自発教育』、森透「教育実践における学習過程の史的考察——三好得恵の『自発教育』の構造とその具体的実践の検討を通して——」、豊田ひさき「『子どもから』のカリキュラム編成に関する歴史的考察——三国小学校における三好得恵の実践を手がかりに——」などがある²⁾。これらの先行研究は、福井県における大正新教育運動の輪郭を明らかにするものとして、はたまた三国小を中心とする史的展開を明らかにするものとして高く評価できるものであるが、他方で、当時の福井県教育者たちがどのように〈旧教育〉から〈新教育〉への転換を意図し、その実現のために如何なる努力を注いだのかという点を明らかにしてきたとはいえない。

そこで本稿では、福井県私立教育会発行の『福井県私立教育會雑誌』・『福井県教育會雑誌』や福井県教育会発行の『福井県教育雑誌』・『福井県教育』、あるいは福井県教育会と福井県自治協会共同発行による『教育と自治』³⁾の記事内容を中心にしながら、当時の福井県教育者らが、〈旧教育〉に対して自ら〈新教育〉を表明し転換を図ろうとするその様相を、つまりどのように〈旧教育〉を批判、否定するという立場を確立し、自らの考えを〈新教育〉の内部に位置づけていくのかという点を詳らかにしていきたい。

1. ヘルバルト主義的教育の普及

まずは、後に〈旧教育〉として批判されることになるヘルバルト主義的教育の広がりについて簡単に見ておこう。ヘルバルト主義の考えは、教育勅語の頒布（1890）、小学校令の第2次全面改正（1890）、小学校教則大綱の制定（1891）などによって公教育体制が整えられていくとともに、教科内容を授ける方法、技術が問題であるとされるようになった時勢において、もっとも適合した教育方法として、明治20年代の日本教育界に流布していったものである。

本稿で取り上げる福井県においても、明治20年代終盤からヘルバルト主義の考えが見受けられるようになる。たとえば、1896（明治29）年8月に寄稿された岡本常次郎「實地教授指針」（『福井縣私立教育會雜誌』第22號、20-22頁）には、「教師は兒童を制御するの權能を有し兒童は教師に服事するの義務を保つ」と書かれているが、こうした文章からも、この時期の教師と子どもとの関係を読み解くことが可能である。つまり、あくまで教育の主導権は教師にあり、子どもは教師に従う存在だと認識されていることが了解できよう。

また岡本常次郎は、次号にこの続きの論を寄稿しており（『福井縣私立教育會雜誌』第23號、11-14頁）、そのなかで「類化」⁴⁾について以下のような説明を加えている。「(一) 新觀念を明瞭ならしめん爲めに觀念を精密にすべし」「(二) 新觀念を包容すべき舊觀念を豫じめ引出し且之を分解し置くべし」「(三) 舊觀念の類化に適するやうに材料を撰擇しもし了解に苦しむ部分あらば之を省き了解し易き部分のみを課するやうにすべし而して了解し難き部分は觀念の擴張するに従がひ漸次に之を教ふるやうにすべし」「(四) 教材は必ず適當なる排列又は解釋をなして與ふべし……教材は兒童の興味發生に適合するものたるべし……教材は兒童の興味を發生せしめされば其求知性を満足せしむること能はず」。以上の説明内容は、まさにヘルバルト自身が唱えた、明瞭・連合・系統・方法という体系を噛み砕いたものであり、こうした紹介を経ながら、福井県内にもヘルバルト主義の考えが普及していくのである。

ほかにも、1898（明治31）年8月刊行の『福井縣私立教育會雜誌』第32號には、「授業法批評要項」（49-51頁）というタイトルのもと横山榮次（1867-1933）の意見が載せられているが、ここにも「イ 教授の目的は正しく指示せられしか」「ロ 新觀念の揭示に先だち類化觀念は明瞭に整理せられしか」「ハ 揭示せし所は確實に把握せられしや」「ニ 新舊觀念は適切に聯合せられしや」「ホ 新觀念は明確に構成せられしや」「ヘ 應用は適當に導かれしや」というヘルバルト主義的教育の原理が示されている。興味深いのは、後に、奈良女子高等師範学校第2代校長（1919-1932）として新教育への足がかりを築いていくことになる横山榮次——横山の校長就任と同じ年に附属小学校主事に着任したのが木下竹次であり、また横山、木下からわずか半年あまりではあるが同じ教員として薫陶を受けたのが三好得惠である——が、まだこの時期はヘルバルト主義的教育を志向していることであり、教育界全体の趨勢をこうしたところからも推察できるであろう。

実際、福井県におけるヘルバルト主義的教育の支持は、明治30年代初頭まで続いていく。1899（明治32）年5月、「福井縣師範學校に於ける西村茂樹翁の講話要領」（『福井縣私立教育會雜誌』第36號、1-3頁）には次のような記述が見られる。「小學の兒童を教ふるにも固より親切なるを必要とすれども之と同時に一方にはまた大に威嚴を保つべきの必要あり現時の小學教育に於ては取扱方親切に過ぎて却て威嚴に乏しきやの觀なき能はず小學兒童の時期よりして己に放肆なるか故に進んで中學に入りたる後も己が意の儘に振舞ひ校長教師の命を用ひざるに至る小學教師は宜敷一段の威嚴を保たざる可らん」。このように、明治30年代初頭までは、教師の威嚴が取り上げられるなど、ヘルバルト主義の考えが主流だったのである。

一方で、同時期の1897（明治30）年8月、「現行はるゝ教授上の弊害」（『福井縣私立教育會雜誌』第27號、35-36頁）において、「開發教授法」の弊害がまとめられているように、ヘルバルト主義的教育の普及以前に教育界に浸透していた「開發教授」への批判を行うことで、ヘルバルト主義普及への道筋を固めようとする論稿も存在してい

る。この論稿の一部を抜き出してみると、「開發教授法」の弊害として、「一. 開發教授法の誤解より何事も問答的に偏する弊害」、「四. 教師の助力多きに過ぐる弊害」、「五. 妄に興味を添ふるよりして苦學の習慣を得しめざる弊害」、「六. 教材撰擇の標準を誤る弊害」、「十六. 猥に教授時間を消費する弊害」などが挙げられている。

そもそも、一般的な教育史的説明によれば、この時期の教育界の変遷は次のように表されることが多い。

ベスタロツツイの實物直觀教授法が開發教育（開發教授）の名稱をもつて明治12年頃からアメリカ合衆国より伝へられた。これによつて19世紀中頃に發展してゐた諸外国の教授方法運動と結びついたのである。その後明治20年代に於ては、ドイツのヘルバルト學派の教授法が傳へられ、特にそのうち五段教授法は、初等教育方法に大きな影響を持つたのであつて、知識的教材を教授する方法がこの頃に於て纏つた様式を採るに至つたのである⁵⁾。

さて、こうしたヘルバルト主義的教育の普及過程を体系的にまとめた論考として、1900（明治33）年2月、田名部彦一「教授法の沿革」（『福井縣私立教育會雜誌』第39號、1-10頁）を見ながら、ここまでの流れを今一度整理しておこう。田名部は、「明治時代の授業の方法」を順に「(一) 器械的教授時代」「(二) 開發的教授時代」「(三) 類化教授時代」と表し、各時期について説明を加えているが、ここでは特に、(二) (三) に注目したい。田名部によれば、「開發的教授時代」とは、「大体明治17・18年頃よりして、26・27年頃迄流行した教授法」である。その特徴は「教授は觀察を以て先とせざるべからざる」と考えるところにあり、「生徒の注意を惹き起す爲に實物を利用」したのである。こうした「開發教授法」は、「教授の方法の上に於いて實に一大進歩であつたものの、他方で、「愉快に生徒に知識を與ふる」ことに重きが置かれたために、生徒が「自分より充分に研究しやうといふ自立心を起さないといふ弊が生じて」しまったことも事実であつた。こうした「開

發教授法」の広まりの裏側で、着々と「類化の教授法」（ヘルバルト主義的教育）へと素地は整えられていった。田名部もまとめているように、「明治20年頃に文科大学に於」いてハウスクネヒト（Emil Hausknecht: 1853-1927）が『『へるばると』氏の教育學說』を講演したことに端を發し、『『へるばると』學說を廣むるに盡力する人、谷本富氏、湯原元一、本莊多一郎氏の如きは當時文科大学の特約生としてはうすくねひと氏につきて『へるばると』派の教育を研究し』たのである。しかし、それだけでは「開發主義の盛なる時代」にヘルバルト主義的教育が普及するわけもなく、と田名部は私見を交えながら、「其の後太平洋を隔てて遙か對岸にある所の米國の教育學者が類に『へるばると』派の教育と教授法を研究」し、さらに「獨逸に渡り『へるばると』は勿論、其の流派のらいん、ちるれる等の學說及實地の研究をなしてより頻りに流行」、「其の結果か直ちに吾國にも影響」し「明治24年の頃からして『へるばると』氏の教育學說を研究する人が多くなり」、「從ひて類化の教授法といふものも廣く行はるる様にな」つたのだ、とまとめている。

以上が、この先、〈旧教育〉として批判されることとなるヘルバルト主義的教育の普及の様相であつた。

2. ヘルバルト主義的教育からの脱却

ヘルバルト主義的教育は、明治の日本における代表的教授法として紹介されることが多いが、歴史の変遷のなかに位置づけると、意外なほどにその繁榮の時期は短い。明治20年代から普及していったかと思えば、明治30年代の中盤にはすでに、その教授方法に一部注意を促す、あるいは修正、改善を求める見解が現われてくるのである。もちろんこのことには、1899年4月、樋口勘次郎（1871-1917）が子どもの自発的活動を重んずる教育を唱えた『統合主義新教授法』（同文館）を上梓するなど、この時期、大正新教育運動への胎動がはじまりつつあつたということも少なからず影響しているといえる。しかし、同時に教育に関して新たに様々な見解や見方が出現してくること

も大いに関係していると思われる。ここでは、その一つひとつをすべて考察するわけにはいかないが、①〈遊戯論〉の隆盛、②〈児童研究〉〈心理学〉〈実験教育学〉の隆盛、③〈地方的色彩〉の要求、という3点に絞り、以下で見てみたい。

①〈遊戯論〉の隆盛

この当時、たとえば、富永岩太郎『教育的遊戯の原理及實際』（同文館、1901年）、コロツァ著・菊池俊諦解説『遊戯及心理及教育』（育成会、1902年）などが出版されているように、「遊戯」の意義を見直そうとする気運が高まっていた。『福井縣教育會雜誌』上においても、1901（明治34）年3月に涼山生「遊戯を論ず」（第44號、4-6頁）という論稿が見受けられる。ここには、「遊戯なるものは活動性を有する兒童の天性にして自然のもの」であり、また「兒童の好尚と一致せるもの多」し、という見方が述べられているが、この点は上記の著作などにも共通して見られる記述である。つまり、この当時の遊戯論は、子どもの自然本性の顕れとして遊戯を捉えることの意義や必要性を訴えかけるものが多く、自ずと読者に子どもの特性を意識させるような面があったのだといえよう。

②〈児童研究〉〈心理学〉〈実験教育学〉の隆盛

そもそも、1890（明治23）年には哲学と心理学系の研究者らによって「日本教育研究會」が設立され、また1898年には雑誌『児童研究』が創刊されている。『福井縣教育會雜誌』上においても、1900年刊行の第41號から第43號まで、「児童研究」という欄が設けられ、多くの紙幅を割いて「児童の發達」などの詳細が紹介されている。第41號（35-43頁）では、「博士『スタンレー・ホール』氏の児童教育に関する實驗」、「生後20ヶ月の兒童の知得せる語數」「児童生後100日より200日までの情態」、「児童の意地わるきを矯正する研究」などが載せられ、詳細に説明が加えられている。

こうした心理学を中心とする新たな教育研究方法の隆盛により、〈児童の稟性（個性）〉、〈児童の活動〉、〈児童の天性〉といった言葉が繰り返し唱えられるようになり、その重要性も認識されるよ

うになっていった。その結果、多くの教育者たちに子どもの發達や活動性を自覚させるに至り、教育論の主役が〈教師〉から〈子ども〉の側にシフトしていくのである。

あるいは次のように説明されることもある。すなわち、明治中盤以降、日本にも広く浸透したヘルバルト主義的教育学が「極めて思辨的性質のものであって、觀察實驗を方法とするものではなく、「特に教授法上に重苦しい沈滞の空氣を醸成した」ために、こうした思弁的、規範的な教育心理学とは異なる、教育的事実研究を目論む「實驗教育学」が、明治の終わりごろから日本でも唱えられていったのである⁶⁾。思弁的、規範的な教育学から、子どもの実態を觀察、実験、統計などによって經驗的に考察していこうとする「實驗教育学」的方向への転換が、〈旧教育〉から〈新教育〉へという改革運動を後押ししたことは想像に難くないだろう。

③〈地方的色彩〉の要求

とりわけ〈地方的色彩〉を前面に出した教育が求められるようになったという点は、福井という土地柄の影響もあると推測され興味深い。1914（大正3）年3月、藤井金五郎「教育管見」『福井縣教育』（第106號、7-10頁）には、以下の記述が見受けられる。「その地方の事情境遇と割切せる學校、換言すれば當然その地方に生るべき學校、其の村の事情と必然的の密接な關係を有する、其の儘を他に持つて行くことの出来ない學校の生れるのを望むのである」と、さらには「地方經濟、青年及び一般の風儀、兒童の學力、性向は地方の歴史および其の他の事情により極接近せる地方と雖も案外異なる狀況を有する」のであるから「學校の教育方針及び方法」は「地方本位であり得る餘地がある」と。藤井は、前提として、「普通教育」とは「人間として又國民としての要素は偏することなく發達せしめるを要する」もので「あらゆる方面の趣味の完全なる基礎を養成するのが目的」であるとしながらも、「本縣（福井県）の事情が皆々に地方的色彩を有することの多き割合に各學校の特徴を發見することが出来ない」ことを嘆き、それまでのヘルバルト主義的教育のように

齊一的、形式的なものではなく、独自の、即応的な教育を求めようとしたのである。

このように、様々な領域から新たな見方が提出されていくことに伴い、教育に対する語りの幅が広がっていったことは、〈旧教育〉から〈新教育〉への転換を大いに促す契機となっていったはずである。1914年3月刊行『福井縣教育』の巻頭言「三段論評」(第106號、2頁)には、「岡部廣島高師教授」の「講話」内容として、次のような文章も確認できる。「氏は……歐米に於ける教育思潮の大なる流として間接的訓練をあげその實例としてモンテソリー女史の訓練方法をあげ自己活動を指導するを以て教師の任とし、教師が一々先立ちて干渉に過ぐるの誤れるを述べ兒童に爲さしめ背後にありて監督するを以て其の要を得たるものとし……最後に兒童は活物なるを以て教師は新に何物をも與ふることを得ざるを例證し只兒童の自己活動を利用するを以て教育の仕事と」すべしと説いたという⁷⁾。今や、教師と子どもとの関係性の理解は大きく変化したようである。もちろん、広島高等師範学校教授の講話内容を紹介したにすぎない文章とはいえ、こうしたものが巻頭言に書かれるようになったという事実だけでも、すでにヘルバルト主義からの脱却が意図されていることが了解できよう。

かくして、この時期の教育状況を的確に叙述するとともに、〈旧教育〉の問題点と〈新教育〉の向かうべき先を論じたものとして、1914(大正3)年5月には、小栗龍川「新思潮と吾人の自覺」(『福井縣教育』第108號、6-8頁)という論稿が姿を見せるようになる。小栗はいう。「著しく唱導せらるゝ新思潮は何ぞ。即ち兒童に自學自治の精神を抱かしめ、此の精神によつて兒童をして自學自習せしめんとするのである」と。そもそも「教育は意識的のもので、単に教科書にある事實や、教育者自らが保有する所の智能藝術を、切實的に將た言辭巧に、其の場の景気をつけて傳へるのが教育ではあるまい」、「教育者自らの智能藝術の發表ではなくて、熱誠なる努力によつて、適當なる方法に俟ち、自己の智能を精神的に傳へるのであると信ずる」と。小栗は、「新時代の教育者と

しては、反省し自覺する所あるべき筈のもので、徒に旧慣を保守するのも時代後れと言はねばならない」と、新時代への希望を込めて語っている。どうやら福井県教育界においても、新教育が意識的に語られる時代がやって来たようである。

3. 新教育の紹介

全国的な趨勢と比べると幾分遅れをとっているものの、まもなく福井県内にも新教育という新たな息吹が広まりを見せようとしている。とりわけ既存の教育(旧教育)の悪しき点を列挙し、それを克服するための新教育というような対比によって、新教育の相対的優位性を提示しようとする論稿が数多く存在するようになる。たとえば、1918(大正7)年9月、長野県松本中学校教諭、矢澤邦彦の寄稿による「教育と自育性」(『教育と自治』第1巻第2號、1-2頁)には、「人性の根基には此の植物の向日性の如くに理想に向ひ憧憬に奮進する嚮動があるのではないか」、「私は教育の上から此嚮動をさして自育性といふ。教育の効果は此自育性の上に幾許の援助と鼓舞とを與へるかにある。教育によつて無を有にする事は出来ぬ」という考えが述べられている。この箇所からは、あくまで教師は、子ども自ら成長しようとする力を援助する存在に過ぎず、「無を有に」するような旧教育的イメージで教育を捉えるべきではないとの認識が窺えるだろう⁸⁾。

ほかにも、1920年4月号に掲載された瑠草「教育者と人間味」(『教育と自治』第3巻第4號、45-47頁)には、「教師は機械的畫一的教育により兒童の尊き天性を没滅し、心靈を固化せしめて、何等固有の色彩なき齊一的の凡人間をつくらんと努力する」と現状としての旧教育を批判する文章が述べられている。そしてこの続きとして、「教育は精神的の作用であり「機械的畫一的に行はるべきものではない」との考えとともに、さらに「米のジュキー(デューイ)や我が小西博士などのデモクラシーを根據とする教育の主張に双手を擧げて賛同する」と、新教育支持を以て結ばれるのである。

はたまた、同年6月号の川村七治「現代思想に

鑑み教育上注意すべき諸点」(『教育と自治』第3巻第6号、21-24頁)では、「現在のやうな人格を無視した鑄造式な師範教育を全然改造して合上せしめねばならん」と旧教育にもとづく状況を批判した後、「綴方教授では児童の自由性を害はず勉めて思想の發表力を大ならしめ文操の圓滿なる發達を遂げさせねばならん」と新教育への期待が述べられている。このように旧教育の悪しき点を列挙し、それを克服するための新教育という表現方法による文章は、明治中盤のころの文献には決して見られなかったものであり、この時期になって誕生した、新教育という考えへの転換を証明するものといえよう。

こうした新教育への転換が読み取れる決定的な文献として、1922年5月の「高橋首相より小學校教員へ」(『教育と自治』第5巻第5号、6-7頁)を挙げておこう。当時、第20代内閣総理大臣であった高橋是清(1854-1936)は、以下のように、植物への譬えも活用しながら新思想の利点を訴えた。

凡そ初等教育の要諦は児童各自の稟性に従ひ適宜に之を助長して其長所を發達せしめその短所を補正し個性的に充分注意して之を教育せねばならぬ故に彼の詰込主義の教育の如きは害多くして益尠なくその結果児童前途の身心の發達を妨げはせぬかと思ふ……元來児童は草木にたとふれば嫩葉のやうな時代であるから之を培養するにはその苗時から細心の用意を以て悪い芽は之を除きよい芽はつとめて之を助長して之を發達せしめねばならぬ……教育者の日常指導教育する児童は行く行く我國家の優良なる國民として我國の砥柱となるべきものだから児童の爲め常に善良なる品性の養成を標的として銳意その教育に従事されん事を熱望してやまぬ次第である。

ここに見られる「児童各自の稟性に従ひ適宜に之を助長」する、「悪い芽は之を除きよい芽はつとめて之を助長」する、といったいい回しは、新教育思想の本質を植物に譬えながら分かり易く説明したものだといえよう。

ほかにも、福井県大正新教育運動の牽引役とい

える三國小校長、三好得恵が1925(大正14)年に書いた文章からも、旧教育の悪しき点を克服せんがための新教育、という図式でもって説明している箇所がある。

旧教育打破も自由教育尊重も旧教育と戦つた人にもみ叫ばれる語であり画一教育によって不成功になつた人に於てのみ口にせられる語である。……従來の教師本位、画一平等、個性無視等の誤れる教育法に対する反動から、どこまでも教育は児童中心でなくてはならない。他律的他動的な学習では眞の徹底がない。自主的自発的でなければならない。個性尊重は児童各個の上に自由を認めなければならないという叫に外ならないのである。……教育という仕事は要するに児童の学習意志を刺戟誘導して自ら求めて止まない態度にまで訓練し自ら無限に問題を發見構成して自ら堪納するまでに解答練成するに至らしむべきものであることを論理的に心理的に考究し確信して建設を企てたのが現自發教育である⁹⁾。

こうした例証をこれ以上挙げるまでもなく、福井県教育界の趨勢はすでに新教育に傾いてきたことは誰の目にも明らかであろう。

ところで、この当時の雑誌には、他校の新教育実践を參觀しに行った様子を書かれた記事も数多く存在している。たとえば、1920年12月、吉田郡、原喜代松の「自由教育を視る」(『教育と自治』第3巻第12号、30-34頁)には、5頁の紙幅を割いて千葉県師範学校附属小学校の視察の様子が書かれている。原は、千葉県師範学校附属小学校への入学申込が多数あることを知り、「行つて見ると意外の大人氣である」と述べている。さらに、「自由教育といふからには丸で児童の氣儘勝手にでもして置く様に想像して居たけれども實際を視て其の組織的で統一があつて立派な理想的の案を立て、幾十人の職員が同一歩調でやつて居らるゝのに驚いた」と、視察の印象を好意的に書き残している。あるいは、同雑誌の「婦人評壇」(『教育と自治』第3巻第12号、58-60頁)の欄に、福井県大飯郡の「女教員諸氏の視察旅行の感想記」が載

せられているが、ここにも興味深い記述が見られる。井上生「奈良高師附属参観」には、次のように書かれている。「此の學校（奈良女子高等師範学校附属小学校）の主旨は兒童の自由を尊重することでありませう」、「教室内」や「廊下にはり出された圖畫等は皆自由氣分が溢れて居た」と。このように、教育者のなかには、視察を通して新教育受容へと傾いていく者も少なくなかったのだと推察される。

ほかにも、当時の福井県教育界の状況が見て取れる論稿として、新教育思想に対して早いうちから高い関心を示し周りの牽引役となった人物と、反対に最後まで新教育思想を受け入れようとなしな人物が会った際の会話が記録されたものがある。それは、『教育と自治』1924年7月号に掲載された松崎強造「永遠の生命」（第7巻第7号、13-19頁）のなかに存在している。以下に引用しよう。

或小學校の女の先生が私の所へ見へたことがあります。そして近代の教育について深い懊惱を感じてゐる様でありました。「私は所謂自由教育とか、ダルトンプランとかいふ新しい思潮については何も深い研究を持ちません。しかしたゞ兒童の自儘勝手の振舞を是認して、遊びたいものは、騒ぐに任せることが所謂新教育であるとするならば私は何処までもこれ等の思潮に反抗せねばなりません。私の校長さんは新教育を主張されます。兒童を愛せよと仰せられます。そして仕事をしない兒童や遊ぶことばかりに熱中して何しに學校に来てゐるのかわからない様な兒童に對して注意すらも與へることが出来ないのです。自由教育の眞諦を理解しない私は全く五里霧中に迷つてゐます。そして『如何したらよいのでせう』と校長さんに聞くと、『奈良へ行つて見て來い』といはれます三國や福井の春山を見たらよいだらうといはれます。でも私の不敏なのか、そうした學校へ行つても、眞實のことは一向私にわかりません云々。」とありました。私は黙つて聞いておりましたが、最後にたゞ一言「まだまだあなたの苦勞が足りないのでせう」といつて置きました。

女性教員の悩みに対して、「あなたの苦勞が足りない」といい切るあたりからも、当時の新教育優先の考えが理解できるだろう。

4. 新教育実践の展開

さて、最後に以下では、各学校沿革誌や教育史関連の文献をもとに、福井県内で実際に行われていた種々の実践について見ておきたい。

たとえば、勝山市の成器小学校では、長谷川四郎松校長自ら奈良女子高等師範学校附属小学校を一週間参観し、そこで得た経験と知識をもとに実践を展開していた。「兒童の自己活動による生活を尊重し、自己動機による努力と興味を以てその特有の個性を發揮させ伸展せしむべき教養方針を定めて実施に着手し」、さらに「兒童自身の内省と自覚により、自発的行動を尊重する目的で各学級の委員を以て組織」する「兒童自治会」をつくり、「全校の訓練上に関する諸問題を討議させるため、毎月一回開催した¹⁰⁾」というのである。ほかにも芦原小学校のように、1932（昭和7）年2月に研究会を開催するなど、長年の研究の成果を明らかにできるほど実践が実ったという学校もあれば、一方で、坂井郡内の大石小学校、高椋西小学校のように、三国小に似た学習施設をつくり研究に没頭したが成功には至らなかったという学校も存在している¹¹⁾。

数ある学校のなかでも、福井県内でとりわけ注目を集めたのは、やはり三好得恵校長率いる三国小であろう。周知のように、大正期にかけては、新教育実践の有名校を求めて全国レベルでの視察交流が盛んであったが、三国小も多数の視察を受け入れていた。次に紹介するのは、群馬県北甘楽郡視学や利根郡視学などを務めていた森田精一（1886-1977）が、ダルトン・プラン研究のために群馬県内若手教師を率いて三国小へ視察旅行に出た際（1924）の手記である。

福井県三国小学校に就いては、教育問題研究その他の雑誌にあらわれている。視察の目標は現制度の網の中の市町村立多数小学校たる三国校の実際如何であった。この視察の希望は丁度

1か年前からあったが、今年4月たまたまパークスト女史の巡回講演が北陸に開かれ富山福井にも該案が試みられている事を知り、富山の星井校等も併せてと思って出かけた。時は6月9日で、三好校長から「11、12日は今のところ何の差支えもありませんから」という返事を読んで後1週間目、折しも郡内有志の同視察者と合して30有余名……帰校して後この拳の歓ぶべく祝すべきであるという事を一層深く感じた¹²⁾。

そもそも三国小は、三好得恵の牽引のもとで、「自発輔導主義」の教育を公開していた。来校者が最大数となった1925年には、1年間で2000人をこえる参観者があったという。しかも、その大半は県外からの参観であり、遠くは沖縄、台湾、樺太、北海道、満州、大連、朝鮮、上海などからの者もいたのである¹³⁾。

おわりに

本稿は、明治末期から昭和初期にかけての福井県教育者らが、〈旧教育〉に対して自ら〈新教育〉を表明し転換を図ろうとするその様相を詳らかにしようとするものであった。そのため、〈新教育〉のその後の衰退には焦点を当てなかったが、以下に簡潔にまとめておきたい。

たとえば、三国小の新教育実践の場合、戦時体制への移行や、1931（昭和6）年の出火が、〈新教育〉衰退に大きな拍車をかけたようである。『三国町百年史』によれば、1931年ごろになると、「わが国初等教育研究のメッカの観を呈した三国尋常高等小学校の自発教育も、中学校入学の激化のための入学準備と戦時体制下の教育の影響をうけるようになり、さらに同年の出火による校舎焼失、軍国主義の台頭によって衰退、1933（昭和8）年9月には三好校長に代わって高森鉄蔵校長が着任したことにより、「時代思潮の変化や国際情勢の緊迫化を背景に、従来の教育方法に対する反省を加え、その長短を研究し、新しく教授面では実力養成を第一主眼とし、訓練面では労作を通ずる訓練を重視するようになった¹⁴⁾」のだという。また、

実際には、内部で関わっていた教員間にも温度差があったようで、新教育といえど、すべての支持を得られていたわけではないようである。そのことを立証してくれるのが、1972（昭和47）年6月に記録された、とある座談会での回想内容である。この座談会において、吉川文次（当時、福井女子短期大学長）と田中幸（元、惜陰小学校長）は、三国小を牽引した三好得恵の「自発輔導主義」に対して次のように述べたのである。

吉川：これは非常にいいと思うんですね、ですけども、そのために先生がもっているものを、ことさらに隠してしまうっていうような形で、手っとり早くいえばわれわれは理解させてしまうものをどうしても出せないんですね。ピリッとも出さないんですね。ああいうようなことでは、学力っていうものは、むしろおちるんじゃないかというようなことで、われわれは若い時、非常に迷いました。……わたしは、全面的には賛成できなかったひとりなんです。

田中：決してわたしはあれはいいと思いませんね、なぜかっていいますとね。自分でちゃんとプログラムを作って、そして、図書室で参考の書物をとってきて、それを調べていくだけです。……わたしは、何を求めたかっていいますとね、やはり、先生と対面してね、先生のことばからほしいなっていう気がしましたね。で、ある期間やるとひとりひとり先生のところへ行って、お前どこまで調べた。そして、二つか三つ質問されて、それで終わりですがね。何か、今でもやっぱりあれはよくなかったと思う¹⁵⁾。

読んで分かる通り、運動内部には様々な考えの教育者たちがいるのであり、こうした反対派の勢力が何かを契機に増していけば、衰退という結末につながっていくのであろう。

さて、かつて筆者（増田）は、本稿と同様の目的・方法に基づきながら群馬県における大正新教育運動についてまとめたことがある¹⁶⁾。そこでの考察

と、今回の福井県に注目した考察では、いくつか相違点が見られ興味深い。たとえば、本稿のなかでも触れたように、福井県はヘルバルト主義の考えが広まるのが他県と比べ若干遅れをとり、また新教育の普及に関しても幾分の遅れが見られる。これは、おそらく福井県の立地条件に大きな要因があるものと思われるが、他方で、教育のなかに「地方的色彩」を求めるような考えが出てくるあたりも、群馬県では見受けられなかった点である。今後は、福井師範小主事として数多くの教育者を育てた篠原助市（1876-1957）の活動と本稿の内容との関係性も含めながら、さらに福井県大正新教育運動史の特徴とその詳細を明らかにしていきたい。

【註】

- 1) ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart : 1776-1841) 自身は、教授を明瞭・連合・系統・方法という体系でもって確立したが、その後継者のチラー (Tuiskon Ziller : 1817-1882) が明瞭の段階を分析と総合に分け、五段階教授を提唱した。またライン (Wilhelm Rein : 1847-1929) は、各段階の名称を実際の進行に即して改め、予備・授与・比較・結合・応用 (予備・提示・比較・概括・応用) とした。日本では1887 (明治20) 年以降、このラインの五段階教授法が「ヘルバルトの五段階教授法」として普及した (下程勇吉監修『新版教育学小辞典』法律文化社、1976年参照)。
- 2) 先行文献の詳細は以下の通り。小原國芳編『日本新教育百年史』(第5巻、玉川大学出版部、1969年)、福井県教育史研究会編『福井県教育百年史』(第1巻、福井県教育委員会、1978年)、秋田慶行『三好得恵と自発教育』(学苑社、1979年)、森透『福井県における大正自由教育の研究』(『福井大学教育学部紀要Ⅳ (教育学科学)』第42・43・44巻、1991・1992年)、森透『教育実践における学習過程の史的探究——三好得恵の『自発教育』の構造とその具体的実践の検討を通して——』(『日本の教育史学』第37集、教育史学会、1994年、49-64頁)、豊田ひさき『「子どもから」のカリキュラム編成に関する歴史的考察——三國小学校における三好得恵の実践を手がかりに——』(『教育学研究』第72巻第4号、日本教育学会、2005年、74-86頁)。
- 3) もともと福井県内各郡市に設けられていた教育会組織が、1886 (明治19) 年7月に連合会としての「若越教育会」となり、さらに1889 (明治22) 年に「福井縣私立教育會」と改組された。そのときより発行されたのが『福井縣私立教育會雜誌』(1900年5月、第41號まで)、『福井縣教育會雜誌』(1900年7月から1901年10月まで、第42號から第46號まで) である。その後、1901年に社団法人「福井縣教育會」となり、1905 (明治38) 年6

月から発行されたのが『福井縣教育雜誌』であり、途中から『福井縣教育』(1918年7月、第158號まで)と名称変更された(『福井県教育百年史』第1巻、前掲書、850-853頁参照)。『教育と自治』(教育と自治編輯部発行)は、1918 (大正7) 年から発行された雑誌であり、福井県師範学校卒業後に教員、福井県会議員などを務め、さらに福井県の商業発展に尽力した坪川信一 (1887-1962) が編集を行っていた。なお本稿では、紙幅の関係上、『福井縣私立教育會雜誌』、『福井縣教育會雜誌』、『福井縣教育雜誌』、『福井縣教育』、『教育と自治』からの引用に限って、本文中に巻号と頁数を記載することとする。

- 4) 「類化」は、ヘルバルトの原著におけるApperzeptionの訳語として、この当時のヘルバルト主義的教育を説明する論稿では頻出の単語である。ときに「統覚」とも訳される。
- 5) 城戸幡太郎ほか編輯『教育學辭典』岩波書店、1936年、1821頁。
- 6) 上村福幸『實驗教育學』『教育科學』第5冊、岩波書店、1932年、4頁。
- 7) 1914年3月刊行の『福井縣教育』第106號で注目すべき箇所はほかにもある。それは、師範教諭、上田三平の書評「『輓近の教育思潮』を読む」(43-44頁)である。上田は、この書を評するに当たり、「其の内容は……生活中心の教育或は作業學校の問題、環境整理、……モンテソリー法。児童中心。……即ち現今歐米に行はる、諸説のアウトラインを知るには最も適當なものと思ふ」と紹介している。
- 8) この時期、〈旧教育〉批判と〈新教育〉称賛という論稿以外にも、実際に新教育実践を試行したという報告文が寄せられている。たとえば、1918年11月、福井高等小学校訓導、川村七治が書いた「余の試みつゝある學校自治會」(『教育と自治』第1巻第4號、15-17頁)は、受け持ちの児童たちに学級自治会を試みたところ、思いがけず上手くいったことから、その経路と結果を紹介する、というものであった。あるいは、八村尋常高等小学校訓導、日比子英の「低學年に於ける事物問題取扱につきての一法」(『教育と自治』第1巻第4號、28-31頁)では、八村尋常高等小学校の主要方針として「全児童の自發的活動につとむる」「事物問題の興味深きことを自覺せしむる」「思考創作の智識を啓發せしむる」が掲げられていることから自らが担当する算術科においてもこのことを試みた、という紹介がされている。その記事のなかで、従来、算術科における事物問題 (鮎を9匹とったが3匹逃がした残りは何匹か、といった文章問題) の取扱いは至難とされてきているが、「児童の心情を汲み得て、児童本位と云ふ事を忘れず取扱つて行つたならば、余り、困難を感じず、却つて興味深くなりゆくものである」との報告が書かれている。こうした実際の体験談を掲載することは、読者に新教育の試行を促す意味で大いに効果があったのだといえよう。

- 9) 三好得恵「吾校教育の精神と其の実際」『教育の世紀』第3巻第6号、1925年6月。ここでの引用は、秋田慶行『三好得恵と自発教育』、前掲書、70頁に依拠した。
- 10) 成器西小学校創立百二十年記念事業実行委員会編『勝山市立成器西小学校百二十年史』、1990年、266頁。
- 11) 広瀬均「福井県」小原國芳編『日本新教育百年史』第5巻、前掲書、235頁。
- 12) 池田小学校「ダルトン式中心の教育視察」飯野信義編『今井久雄伝』群馬県教育史研究懇談会、1989年、102-103頁。森田一行は、碓氷トンネル、軽井沢、上田蚕地、川中島、長野、高田、直江津、魚津、富山、金沢、金津を経て三国町駅まで列車の旅を行った。また、三国へ到着する前日の10日には、富山師附小、星井小（自啓教育）を参観している。
- 13) 三国町百年史編纂委員会編『三国町百年史』三国町発行、1989年、502頁。1925年11月8・9日には、「第4回初等教育研究大会」が三国小で開催された。この大会に対して、全国から600余名の参加者があり、慶應義塾大学、小林澄兄(1886-1971)の「新教育思想の基礎づけ」という講演も行われた。ほかにも、1925年、福井県大野教員部会と大野町教育会共同主催による講演会に、小西重直(1875-1948)が呼ばれ、「教育の本質及教育諸問題」という講演——『教育と自治』第8巻第2号(44-46頁)、第3号(19-20頁)を参照——を行うなど、この時期、新教育思想の普及に向けた様々な活動が福井県内各地で開催されている。
- 14) 『三国町百年史』、前掲書、485-486頁。
- 15) 福井県教育研究所編『福井県の教育のあゆみ』、1973年、9-11頁。
- 16) 拙稿「〈旧教育〉から〈新教育〉への転換を意図する教育者たち——群馬県における大正新教育運動への道程およびその展開を中心に」(山崎高哉・労凱声共編『日中教育学対話Ⅲ』春風社、2010年)を参照。

【参考文献】

- 福井市小学校百年史編集委員会『福井市小学校百年史』福井市教育委員会、1974年
- 吉良俣『大正自由教育とドルトン・プラン』福村出版、1985年
- 篠原助市『教育生活五十年』大空社、1987年
- 木内陽一「福井県師範学校附属小学校主事としての篠原助市の教育実践について」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第7巻、1992年、109-130頁
- 篠原助市『篠原助市著作集』第1巻-第7巻、学術出版会、2010年
- 竹長吉正『わかさ美浜教育史1』美浜文化叢書刊行会、2011年

【付記】

本稿は、平成23年度仁愛女子短期大学学内共同研究「戦前の福井県における幼児教育・初等教育の動向について」(研究代表者：増田翼)における研究成果の一部である。